

イマージョン教育実践校における  
生徒の二言語の自己評価：  
各生徒の進学と就職希望とに関連づけて

井 上 智 義

今 井 信 一

### **How Japanese immersion students evaluate their two languages in relation to the tertiary education and future occupation** ---

Few studies have been conducted on the educational influences of immersion programs in Japan, as there are very few schools that have adopted immersion programs in which some of the school subjects are instructed in the second language other than the Japanese language, the students' first language. The purpose of the present research is to reveal how immersion students themselves evaluate their two languages in relation to the next stage of education and future occupation.

Twelve eleventh graders participated in an interview on the educational methods employed at their immersion school. Each interview lasted for about 15 minutes. All interviews were conducted in Japanese.

Results mainly indicated the following three points: (1) all students reported that their dominant language was Japanese; (2) they seemed to recognize that their English proficiency was highly enhanced because of the immersion program; and (3) students who were taking the International Baccalaureate (IB) course appeared to be eager to use English language when going to the tertiary education or finding employment.

## 問 題

『外国人力士はなぜ日本語がうまいのか』、こういう書物がある。日本語教育の専門家が力士にインタビューしたり、相撲部屋での様子を調べたりして、興味深くまとめている（宮崎，2001）。本稿とのかかわりのある部分についてのみ、簡単にまとめると、その習得過程がイマージョンプログラムのいくつかの特徴を兼ね備えているというのである。

さて、イマージョンプログラムとは、身につけるべき目標言語を使って、いくつかの教科を子どもに教えるという教育方法である。1960年代の半ばに、カナダの英語話者の子どもたちのためのフランス語習得の教育方法として開発された。Genesee and Jared（2008）によると、家庭で英語を使用している子どもたちが、英語での読み書きを学習する前に、学校では、フランス語で授業を受けることになる。

代表的なフランス語イマージョンプログラムでは、子どもたちは、5歳の時点で幼稚園（学校に併設された幼稚部）に入り、フランス語を何も知らないにもかかわらず、一日中フランス語での授業を受ける。英語は教科として、通常小学3年あたりで導入されるが、すべての教科は引き続き、フランス語を話す教師によって指導される（Bialystok, Peetes, and Moreneo, 2014）。

カナダで始まり、カナダで急速に広まり、今でも公立学校においてイマージョン教育を受ける選択肢が提供されているのがふつうであり、その教育の成果は多くの研究で確認されている（Bialystok and Hakuta, 1999; Turnbull, Hart, and Lapkin, 2003）。最初に話題にした力士の日本語習得に戻って、どんな点が似ているのかというと、いずれも目標言語を教えようとはしない、しかし、生活環境においては目標言語がふんだんに使用され、その理解と使用が求められる。さらに言えば、学校教育における外国語の授業のように、目標言語に注意を向けさされるのではなく、自分に必要な

情報が、その目標言語でやり取りされる点が共通していると言える。そして、気がつけば、その目標言語をかなり自然な形で身につけているというのである。

ところが、イマージョンプログラムが、どのような形でも、あるいは、どのような環境で行われても、常にうまくいくとはかぎらない。例えば、スペイン語母語話者が多く在籍するアメリカの州などでは、双方イマージョン（Two-Way Immersion）とよばれる教育プログラムが実施されている。そこでは、スペイン語母語話者と英語母語話者が同じ教室で授業を受け、両者がお互いの母語を第二言語として習得することを目標としている。典型例としては、それぞれの言語を母語とする子ども半数ずつでクラスを構成して、例えば、午前中はスペイン語で、午後からは英語で授業をおこなうというようなものである。Steele, Slater, Bacon, and Miller (2016) は、アメリカの都市部で多くの児童が在籍する複数の学校で、このようなイマージョンプログラムの実際について観察事例を含む大規模な研究を実施している。その結果、とりわけマイノリティの子どもたちにとっては、大きな期待がもたれるこのようなプログラムも、教師の実践次第で結果は大きく影響を受ける可能性があることが示唆されている。

さて、日本におけるイマージョン教育の実践校の数が少ないこともあり、その教育成果に関する論文は数少ない。鈴木（2020）は、1992年から小学校でイマージョン教育を始めた静岡県の加藤学園をはじめとする複数の学校でのカリキュラムの問題を紹介している。そして、いわゆる一条校（学校教育法第一条で定める狭義の学校）においては、国際バカロレアのカリキュラムと学習指導要領で求められるカリキュラムの両立が難しいことなどを具体的に記述している。しかし、その教育成果について、とりわけ児童生徒の学力や言語力の問題については、残念ながら直接的には触れられていない。

今井（2010）は、イマージョン教育を実践しているぐんま国際アカデミーに在籍している中学2年生を対象に①語彙力、②単語産出の流暢性、③会

話表現、④日英二言語でのメモリスパン、⑤マンガ場面での英作文の5項目からなるテストを用いてそれぞれの能力を測定した。調査の結果、イマージョンプログラム開始4年半の時点で、一般的な大学生と同程度の英語能力を身に付けていることを明らかにした。

今井（2010）の研究のフィールドとなっているぐんま国際アカデミーでは、特定の教科については、英語と日本語の二言語で授業がなされている。例えば中等部と高等部1年では国語の授業はすべて日本語でおこなわれるが、数学・社会・理科などは50%の授業が英語で、他の教科は原則として100%の授業が英語でおこなわれる。高等部2年以降は国内進学コースとIBコースに分かれるが、IBコースでは国語以外は英語での授業となる。

そこで、今井（2018）は、心理学的観点から日本で英語イマージョン教育を受ける中学生の2言語での教科学習の関連づけを明らかにすることを目的に、ぐんま国際アカデミー中等部3年生58名を対象に、①動機づけ、②言語学習・習得と教科学習の状況、③授業以外での言語使用、についての質問紙調査を行った。その結果、各々の生徒が2言語での教科学習を、自分なりに関連づけて学んでいることが明らかになった。さらに、授業時間の多い言語での学習から授業時間の少ない言語での学習に影響があることが示唆された。

さらに、今井（2018）では、前述の調査結果を踏まえ、11名の生徒に半構造化面接をおこなっている。その結果は、生徒の学習過程には個人差が大きく、個別に把握していくことの重要性について記述している。具体的には、2言語での教科学習の関連づけについては、平衡バイリンガルと考えられる生徒においては、自然と関連づけられる一方で、偏重バイリンガルと考えられる生徒では、支援や本人の工夫によって関連づけているというようにバイリンガルタイプによって2言語での教科学習の関連づけられ方が異なることが示されている。また、数式や公式を用いる数学では、学習用語が多い理科（生物分野）に比べて関連づけやすいというように教科の性質によって関連づけやすさが異なることなどが明らかになった。

著者らは、すでに発達心理学領域の国際会議において、イメージョン教育が子どもの認知発達に与える影響について、複数の研究発表を行っている。

Inoue and Imai (2015) は、イメージョン教育を受けている8年生（中等部2年生）に、“L”と“R”のそれぞれの文字で始まる英単語を30秒間でできるだけ多く書くことを求めた。その結果は、進学校の高校2年生の結果より、さらには、一般の大学生の結果よりも多くの反応数が見られた。また、英語と日本語で実施された数唱課題（digit span test）においても、高校生や大学生では、二言語のテストの間に2桁近い差があるのに対して、イメージョン教育を受けている生徒では、およそ1桁の差しか見られないことが示された。また、早期イメージョン教育（小学一年生からのイメージョンプログラムに参加）を受けている生徒の方が、後発イメージョンプログラム（小学4年生からのイメージョンプログラム参加）の生徒よりも、英語と日本語の言語力の差が少ないことが示唆された。

また、Inoue and Imai (2016) では、同じくイメージョン教育を受けている中等部2年生の62名を対象に、そのような教育プログラムに参加して感じる学校への満足度を調べるため質問紙調査をおこなった。その結果、おおむねイメージョンプログラムに対する満足度は高かったものの、そのような満足度がより高い生徒の方が、英語を積極的に使いたいという傾向が強いことが確認された。

さらに、Inoue and Imai (2017) は、イメージョン教育を受けている12名の高等部の生徒にインタビューをおこなった。その目的は、実際に受けている教育方法についての主観的な評価を知ることが目的であった。結果として得られたことは、全体としてイメージョンプログラムに対しては、好意的な評価をしていたものの、細かな教育方法については、改善の余地があると感じている生徒がいることが判明した。その一つは、ぐんま国際アカデミーにおいては、ある時期、同一の教科を英語使用と日本語使用の二人の別の教師によって教授されることがあるが、その学習進度が必ずし

イマージョン教育実践校における生徒の二言語の自己評価：各生徒の進学と就職希望とに関連づけても同じではなく、また、テストも別々に異なることが問われるため、生徒にとっての負担が大きくなっている可能性があることなどが示された。

本研究の目的は、上記のInoue and Imai (2017) で用いられた同じインタビュー内容を、とりわけ未発表の部分について、新たな視点から分析して、イマージョン教育実践校における生徒自身の二言語を自らがどのように評価し、とりわけ自分の英語力をどのように認識しているのかについて、明らかにしていくことである。

## 方 法

**調査対象者：**高等部2年に在籍する生徒（11年生）12名。参加したすべての生徒は初等部1年生から、ぐんま国際アカデミーでイマージョン教育を受けたものである。そのうち数名については、プレスクール（一般の幼稚園や保育園の放課後に週2回、あるいは土曜日週1回参加する英語教室）に在籍していた者もある。また、12名のうち、6名は国内進学コースを履修、他の6名はIBコース（国際バカロレア・ディプロマプログラムによる授業が実施されているコース）を履修している（表1参照）。前者のコースでは、国語・数学・理科・歴史は日本語で授業がなされ、それ以外の教科および活動は英語による授業となっている。また、後者のコースでは、国語以外のすべての教科を英語で学ぶことになっている。この学校では、初等部と中等部の授業の70%が英語で行われている。さらに、高等部の初年度（10年生）については、国語と数学・理科の50%、社会科の25%が日本語で実施され、それ以外はすべて英語で授業がなされている。

なお、当該の学校におけるIBコースは、高等部の最後の二年間（11・12年生）に設けられている。

**手続き：**生徒一人当たりのインタビューに要した時間は約15分。すべてのインタビューは、第一著者によって日本語で実施された。その内容は、調査対象者の承諾を得たうえで、すべてICレコーダによって録音された。そ

表 1. 調査対象者12名のプロフィール

調査対象者	家庭内英語使用	今のコース	大学進学希望	将来希望する仕事
S <sub>1</sub>	全くない。	IBコース	英語の入試が難関であると言われているJ大学（化学を履修するから）	海外との交流、国際ビジネスとか
S <sub>2</sub>	10%を超えるということはない。	IBコース	日本の大学	生物の研究に関する研究職、大学の先生
S <sub>3</sub>	全くない。	国内理系コース	薬学系	（英検一級を取得しているが）英語を活かした仕事に就くことは考えていない
S <sub>4</sub>	雰囲気と同じ学校に在籍している妹と英語で話している。	国内文系コース	日本の大学（大学生になったら、1年ぐらい短期留学をしたい）	英語で仕事をすることを希望していない
S <sub>5</sub>	たまに気分です。父が海外に留学経験がある。	IBコース	グローバル、国際教育に関する学部	あまり考えてはない
S <sub>6</sub>	5%もない。親戚などが集まって、英語で話してみてもと言われた時。	国内文系コース	日本の大学	貿易でも、何でも、人とコミュニケーションとれるような仕事
S <sub>7</sub>	（妹も同じ学校に在籍しているが）親は英語が話せない。	IBコース	教育か生物の学部	研究者になりたい
S <sub>8</sub>	使わない。両親が英語にトラウマレベル。	IBコース	生物系の学部志望	英語が活用できる仕事を希望途上等で生物に関する仕事
S <sub>9</sub>	親は感嘆詞くらい使う。	国内文系コース	日本の大学の商学部経済学部のあたり	英語が活用できる仕事を希望商社、貿易会社で働きたい
S <sub>10</sub>	？	国内理系コース	化学の研究	英語が活用できる仕事を希望医者WHO海外
S <sub>11</sub>	？	国内理系コース	薬学部志望	薬剤師（英語を活用する機会が少ないという認識はある）
S <sub>12</sub>	使わない。	IBコース	音楽、芸術系の大学	レコード会社の音楽を録音する技術者になりたい

イマージョン教育実践校における生徒の二言語の自己評価：各生徒の進学と就職希望とに関連づけての録音内容は、ほぼ完全な形でトランスクリプトに記述され、個別のデジタルファイルに収められた。

## 結果と考察

表1には、調査対象者12名の簡単なプロフィールが示されている。12名のすべての生徒には、日本語か英語かどちらが得意かという質問がなされたが、それに対しては、全員が日本語であると自信をもって答えた。また、家庭内での言語使用については、その大半が日本語であることがうかがわれる。要するに、学校内では英語が使用されるが、家庭内や地域では日本語が使用されているという環境で生活していることになる。バイリンガルの分類においては、その二言語が習得される社会的背景に着目した、エリートバイリンガルと大衆バイリンガルという区分が用いられることがある（井上、2002）が、彼らは、その区分ではエリートバイリンガルということになる。一般的には、大衆バイリンガルが第二言語を習得すれば、第一言語能力やその発達に支障をきたすと言われるのに対して、エリートバイリンガルにおいては、第一言語が社会の大多数によって使用されているため、第二言語を習得しても、第一言語の発達が犠牲にされることは極めて少ないとされている。

表2から表4までには、インタビューの内容のなかで、各生徒自身の二言語の評価に関係すると思われる部分をインタビューのトランスクリプトから抽出してまとめている（表の中のIの表記は、インタビューを実施した第一著者の井上を示す）。

まず、表2では、イマージョン教育で身につく英語に関しての反応についてまとめている。彼らは、一般校での教育を経験しているわけではないが、おそらく、いろいろな情報から、自分たちの受けているイマージョン教育は、一般的な教育方法とは異なることの認識は十分あるようである。そして、自分たちが話ことばでのコミュニケーションが十分できるのに対

して、一般校に行っていたら、それがなかなか難しいだろうこと、自分たちは英語の文法についての知識は、意図的に教えられることが少ないために、もしかすると、その能力に限界があるかもしれないことなどが示唆されている。また、受験英語の話になると、一般校に通う生徒に比べて、英語力はかなり高いので、英語の受験勉強にそれほど多くの時間をかける必要がないことなどを、教師からの助言も聞いていることもあり認識できている。

また、IBコースを履修していない生徒においては、IBコースがイメージ教育の典型例との認識があり、過去において、一般校への転出を考えたことがあることが推測される発言があるものの、やはり、これまでのイメージ教育で身につけて英語力やネイティブスピーカーとの直接的なコミュニケーションができる環境についての肯定的な評価は、自分のなかでしっかりもっているように思われる。

つぎに、表3では、卒業後の進路と各自の英語力に関する発話についてまとめている。

表1にも示されているとおり、12名のうち6名がIBコースを履修しているが、彼らと他の生徒では、大学の進学希望に関しては、はっきりとした違いが見られるようである。国語以外を英語で学ぶIBコースを履修している生徒では、必ずしも、英語圏の大学への進学希望が強いとは言えないものの、英語に力を入れていると思われる大学やIBコースを履修したことで優遇される大学入試などを活用したいという様子もうかがえる。彼らは全員11年生（高等部2年生）であり、その年度からIBコースと国内理系、または国内文系のコースに分かれて履修を始めているところである。IBコースを履修していない生徒のなかには、英検一級の資格試験で合格しているにもかかわらず、日本の一般的な大学進学を希望している生徒がいることからすると、英語力だけで進学先を決めるのではなく、大学に入ってからやりたいことが比較的はっきり決まっている様子が散見された。

また、自分では「英語が得意じゃない」と発言する生徒もいたが、英語

表2. イマージョン教育で身につく英語に関して

対象者	具体的発話例
◆S <sub>10</sub>	<p>(I: それってすごいことだなあって思うのね。あの一、だから英語は普通にしてて、しゃべれるようになってるわけじゃないですか。)</p> <p>はい、そうです。</p> <p>(I: 英語に費やす時間っていうのは、あんまり必要ない。)</p> <p>ない、だから今も、その受験、受験勉強の相談とかも先生にしてて、で、英語はこれからどのくらいやるべきですかねって聞いてたら、もう、ほぼもうそんな、センターのちょっと前に、過去問解くぐらいでいいよって言われて。</p> <p>(I: そうそう。どんな問題が、どんなやり方で出題されるのかさえ分かっっておけば、順番を入れ替えるとか。)</p> <p>そうそう、そう。なんで、ほかも今でも。それはもう、直前にやればいいと言われて。</p> <p>(I: 技術的なことだけだから、わかってることばかりだもんね、たぶん。)</p> <p>だから、もう、今は本当数学と物理、いや、じゃなくて、数学と理科。</p> <p>(I: 受験に必要な科目をやれと。)</p> <p>受験に必要な科目をやれと、言われました。</p> <p>(I: そうかそうか。えっと、だから大学は医学系の大学なんで。)</p> <p>はい。</p> <p>(I: 別にそれは英語でやってる必要はないわけね。)</p> <p>ま、ないですね。はい。</p>
◆S <sub>11</sub>	<p>(I: その、イマージョン教育で英語力がつくっていうのは、まあ、間違いなと思う?)</p> <p>そうですね。あのおう、やっぱりしゃべれるし、書けるし。まあ、文法とかは(笑)、わりと、あのおう、フィーリングでやってるんで、めっちゃめっちゃなんですけど。理解できるっていうのは、大きいですね、やっぱり。</p> <p>(I: 一般校で行ってたら、受験はできても、全然しゃべれない。)</p> <p>しゃべれない。</p> <p>(I: 聞き取れないっていう人がほとんどだよな。)</p> <p>正直、あ、たぶん、あんなの見てても、暗号だとしか思えませんね。あのおう、やってなければ。</p>
◆S <sub>9</sub>	<p>その…、IBを取らないんだったら、その、普通の公立校に行ったほうが、その受験とかに、こう。いいんじゃないかなとは思ってたんですけど。でも、何か、まあ、今考えてみると、普通に、あの、普通のほかの同級生、全国にいる同級生とかって、英語、筆記とかでできても、こうネイティブの人と関わってないと、話したりはしないじゃないですか。だから、そこらへんを、まあ、学べてるから、そこは大っきいかなあとは、思います。</p>

圏への短期留学は、将来希望するとした者もいる。このことは、IBコースに進んだ他の生徒と比較すると、自分の英語力は、それほどではないと感じているものの、英語に対する拒絶感や否定的な思いはないように思われる。

最後に、表4では将来希望する仕事についての反応をまとめている。12名全員ではないものの、英語をいかした国際的な仕事につきたいと考えて

表 3. 卒業後の進路と各自の英語力に関して

見出し	具体的発話例
◆S <sub>1</sub>	<p>私自身、あんまり英語が得意じゃない。…(中略)  <i>(I: 大学はこういうところに行きたいとか決めてるんですか。もし、差し障りなければ。日本の中?)</i>            日本の中です。あつ、でも、大学生になったら、短期留学はしたいなと思ってます。はい、1年くらい。</p>
◆S <sub>3</sub>	<p>まあ。大学は日本がいい。  <i>(I: 大学は日本がいい。(笑) えつ、え、まだ、親と離れるのがよくないですか。)</i>            いや、でも全然、あの。それは全然問題ない。</p>
◆S <sub>2</sub>	<p>で、高校2年生から、えつと国内進学コースという方向と。インターナショナル・バカロレアコースの二つに分かれます。私はインターナショナル・バカロレアに、です。そうですね。国語以外は全部英語です。  <i>(I: あとは英語でばかり、ざっき言った生物も、えー、社会は? 世界史か。)</i>            世界史になってます。英語でやってます。あつ、えつと、選択式で音楽と美術と、化学の三つの中から選択するんですけど。私は音楽を選択してます。  <i>(I: 音楽している、ああ。それはもう、先生はネイティブの先生で、英語でやっている。)</i>            そうですね。…(中略)  <i>(I: その、IBのコースに行ってるっていうことは、英語で受験して、英語圏の学校とか、あるいは、英語で授業をやってるような、日本の大学に進むかなというふうに、勝手に思ってますが、そうですか。)</i>            意外とそんなことはなくて。えつと、そうですね。あのう、ま、英語圏の大学にも、あの、十分視野に入るんですけども、えつと、日本でも…。IB認定校じゃないですけども。IBを取った人に。を、少し、いろんな条件で、あの、やる、やらせる入試。  <i>(I: 入試制度が、いろんな大学で、最近でできてきましたよね。まだ少ないけど。)</i>            そうです。  <i>(I: うーん、だからそれを利用して。)</i>            入れるっていつて。  <i>(I: あの、いわゆる、偏差値の高い大学とか、世間で言う一流の大学に入る道もあるよ。)</i>            そういう道もありますし。  <i>(I: じゃ、別に英語で、大学で授業を習わなくてもいいの。)</i>            そうですね。というよりは、えつと、私として、私が利用したい、英語を利用したいのは、例えば、えつと研究職っていうのは、結局論文を書いて提出するので。  <i>(I: そういうときに英語で書かないといけないわね。)</i>            そうです。で、そういう。そういう面で、英語が今後も使えと。本当に、もう授業で、はい、じゃあ、こういうプレゼンテーションやってくださいねって言われたら、オッケ、プレゼンテーションね、みたいな教育を受けてるんで。  <i>(I: 受けてるから、しゃべるの全然困らないよね、英語で。)</i>            全然、困らないです。  <i>(I: ああ、むしろ得意種目になってるわけ。)</i>            そうですね。</p>

- ◆S<sub>2</sub> で、高校2年生から、えっと国内進学コースという方向と。インターナショナル・バカロレアコースの二つに分かれます。私はインターナショナル・バカロレアに、です。そうですね。国語以外は全部英語です。  
(I：あとは英語でばっかり、ざっき言った生物も、えー、社会は？ 世界史か。)  
世界史になってます。英語でやってます。あつ、えっと、選択式で音楽と美術と、化学の三つの中から選択するんですけど。私は音楽を選択してます。  
(I：音楽している、ああ。それはもう、先生はネイティブの先生で、英語でやってる。)  
そうですね。… (中略)  
(I：その、IBのコースに行ってるっていうことは、英語で受験して、英語圏の学校とか、あるいは、英語で授業をやってるような、日本の大学に進むのかなというふうに、勝手に思ってますが、そうですね。)  
意外とそんなことはなくて。えっと、そうですね。あのう、ま、英語圏の大学にも、あの、十分視野に入るんですけども、えっと、日本でも…。IB認定校じゃないですけども。IBを取った人に、を、少し、いろんな条件で、あの、やる、やらせる入試。  
(I：入試制度が、いろんな大学で、最近でてきましたよね。まだ少ないけど。)  
そうですね。  
(I：うーん、だからそれを利用して。)  
入れるっていうて。  
(I：あの、いわゆる、偏差値の高い大学とか、世間で言う一流の大学に入る道もあるよ。)  
そういう道もありますし。  
(I：じゃ、別に英語で、大学で授業を習わなくてもいいの。)  
そうですね。というよりは、えっと、私として、私が利用したい、英語を利用したいのは、例えば、えっと研究職っていうのは、結局論文を書いて提出するので。  
(I：そういうときに英語で書かないといけないわね。)  
そうですね。で、そういう。そういう面で、英語が今後も使えると。本当に、もう授業で、はい、じゃあ、こういうプレゼンテーションやっってくださいねって言われたら、オッケ、プレゼンテーションね、みたいな教育を受けてるんで。  
(I：受けてるから、しゃべるの全然困らないよね、英語で。)  
全然、困らないです。  
(I：ああ、むしろ得意種目になってるわけ。)  
そうですね。
- ◆S<sub>8</sub> 大学では、その学びたいことはたくさんあって。大学は、今は生物系の学部に行くことを考えています。  
(I：生物のことが好きで、生物のことを、やっぱり大学で学びたいって。)  
うーん。その、結構、生物と、その環境、あと農学を結びつけるっていうのも結構自分のには興味がある内容で。そうですね、はい。あとは、学校で昔から、そのボランティアとかそういう関係のことに触れる機会が多かったの。その、途上国とかそういうことのほうにも、その生物っていう視点からアプローチできるんじゃないかっていうふうに考えていて。  
(I：ああ、そうか。それだったら、まあ、英語が活用できるし。)  
はい、はい。はい。何か、自分が楽しいっていう感じることで、相手も幸せにできたら、それってすごくすてきなことだなって。
- ◆S<sub>9</sub> (I： じゃあ、日本の大学に、まあ、進学するというのを前提で。)  
はい。  
(I：英語圏の大学に進学したいと思ったりはしないですか。)  
は、ないですね、今のところは。商社に行くとなると、商学部ですけど。  
(I： 商社。国際ビジネスとか。貿易をするとか。)  
そうですね。そこで入れたら、その、何て言うんだらう、英語を使って、その、他国の人ととかコミュニケーションとか。

表 4. 将来就きたい仕事と各自の英語力に関して

見出し	具体的発話例
◆S <sub>10</sub>	<p>(教科の中で)得意なのは、まあ、英語ですね、やっぱり。  <i>(I : 将来、英語が活用できるような仕事に就きたいとか思うことがありますか)</i>  はい、あります。えーと、私、自分も、あの医者に、医師になりたいんですけど。それで、あの、日本国内というよりも、もう世界で。活躍する。て、その、あの、まあ、WHOだとか。そういうあの、あんまり臨床というよりは。その。まあ、あのー、研究だとか。研究の、その分野のスペシャリストになるとか。  <i>(I : 何かのがんのスペシャリストになって。)</i>  なって。  <i>(I : それを研究するとか、も、含めて。)</i>  はい。そういうのか、あと医療政策とかにも興味があるんで。  <i>(I : あっ、予防のために何をしたらいいかとか。)</i>  そうそう。そういうところで、あの、世界。  <i>(I : あ、すごいね。えっ、それはお父さんとかお母さん、どっちかが医者とかではなく、自分で。)</i>  いや、まあ、父は歯医者なんですけども。それ、ま、さんざん、まあ、医者でいいんじゃないと言われてたんですけど。ちっちゃい頃は、もう全く、絶対にならないって言うて。ま、それで本当になりたいって思ったのは。</p>
◆S <sub>6</sub>	<p>えー、あのー。手段の一つとして、英語はあっても。せっかく、このプレから、このずっと、GKAで、この英語を学んできたので。なので、やっぱり、せっかくここまで来たなら、手段としては使いたいかなあ。  <i>(I : 手段としてというのは、通訳とか、専門の英語の職じゃないけど。)</i>  て、あの、その。貿易でも何でも、あの、人と、より多くコミュニケーションとれる。  <i>(I : あー、観光でもいいけど。)</i>  でも (いい)。</p>

いる生徒が多いことが表4の反応からはうかがえる。表4では、2名の発話しか掲載されていないが、表1の一番右の列からは、かなり具体的な領域が意識されていることが推察される。

## 結 論

本稿では、イマージョン教育を実践している、ぐんま国際アカデミーの高等部に在籍する12名の生徒へのインタビューをもとに、彼らの二言語(とりわけ英語力)についての自己評価を、その進学と就職希望に関連づけて明らかにしようとした。日本のイマージョン実践校における児童生徒の学業や二言語能力に関する報告は多くない。とりわけ、生徒自身が自らの言

イマージョン教育実践校における生徒の二言語の自己評価：各生徒の進学と就職希望とに関連づけて語能力について、どのように感じ、イマージョン教育を受けてきたことの意義を実感しているかどうかを確認することは、大きな意義があると思われる。本研究で明らかになったことは、(1) すべての調査対象者について、日本語能力が英語能力を上回っているという主観的な報告が得られたこと、(2) イマージョン教育による英語能力の向上を確実に自らが認識できていること、(3) IBコースを履修している生徒においては、英語をいかした進学や就職を意識していることが多いこと、などが確認できた。

## 引用文献

- Bialystok, E., and Hakuta, K. (1999) "Confounded age: Linguistic and cognitive factors in age differences for second language acquisition." In D. Birdsong (Ed.), *Second language acquisition and critical period hypothesis* (161-181), London: Lawrence Erlbaum Associates Publishers.
- Bialystok, E., Peetes, K.F., and Moreneo, S. (2014) "Producing bilinguals through immersion education: Development of metalinguistic awareness." *Applied Psycholinguistics*, 35, 177-191.
- Genesee, F. and Jared, D. (2008) "Literacy development in early immersion programs." *Canadian Psychology*, 49, 2, 140-147.
- 今井信一 (2010) イマージョン・プログラムを受けている生徒の英語能力に関する研究. 同志社大学社会学部卒業論文 (未公開)
- 今井信一 (2018) イマージョン教育を受ける中学生のL1/L2習得と二言語での教科学習の関連づけ：質問紙調査と半構造化面接から. 同志社大学社会学研究科修士論文 (未公開)
- 井上智義 (2002) 異文化との出会い！子どもの発達と心理. ブレーン出版.
- Inoue, T. and Imai, S. (2015) "The outcomes of English immersion programs in Japan and their language development." Paper presented

at 17<sup>th</sup> European Conference on Developmental Psychology (ECDP2015), Braga, Portugal.

Inoue, T. and Imai, S. (2016) “How children’s second language proficiency improved in an English immersion school in Japan: Focused on their satisfaction of schooling.” Paper presented at 24<sup>th</sup> Biennial Meeting of the International society for the Study of Behavioral Development (ISSBD2016), Vilnius, Lithuania.

Inoue, T. and Imai, S. (2017) “Students’ psychological evaluations on the immersion program at a Japanese school.” Paper presented at 18<sup>th</sup>, European Conference on Developmental Psychology (ECDP2017), Utrecht, The Netherlands.

宮崎里司 (2001) 外国人力士はなぜ日本語がうまいのか. 日本語学研究所.

Steele, J., Slater, R., Bacon, M., and Miller, T. (2016) “Teaching practices and language use in two-way dual language immersion programs in a large public school district.” *Journal of International Multilingual Research*, 10, 31-43.

鈴木克義 (2020) 国際バカロレアと英語イマージョンによる幼少一貫教育：一条校におけるIB-PYPと学習指導要領との両立. 常葉大学教育学部紀要, 40, 281-288.

Turnbull, M., Hart, D., and Lapkin, S. (2003) “Grade 6 French immersion students’ performance on large-scale reading, writing, and mathematics tests: Building explanations.” *Alberta Journal of Educational Research*, 49, 6-23.

**[付記]** 結果の表1および問題（先行研究紹介）の一部は第二著者によって執筆されたが、その他は、第一著者によって執筆された。なお、相互に加筆修正して、両名で最終原稿を確認した。